

## ブラジルの日系企業 — 30年の軌跡：成功 の条件は何か —

水 野 一

(上智大学)

本研究では、日本企業の対伯進出の歴史、動機および特徴を明らかにするとともに、日系企業がブラジルの外資政策にどのように対応しつつ経営を展開してきたかを検討し、成功の条件を探ってみた。海外進出企業の分析方法としては、直接投資理論を中心とした経済学的アプローチと、企業経営分析、経営資源、技術の移転などの経営学的アプローチがあるが、この研究では外資政策との関連性に重点をおいた歴史的・政策的アプローチを採った。本研究から得られた結論は次のように要約することができる。

1. ブラジルは我が国の海外直接投資において米国、インドネシアに次ぐ第3位の投資先であり、また製造業向け投資では米国に次いで第2位を占める重要な投資先である。

2. 我が国から遠く、地球の反対側にあるブラジルに対して、かくも多額の投資が行なわれた理由としては、日系社会の存在、ブラジルの政治的安定、工業化の進展などのほか同国が比較的開放的な外資政策をとってきたことをあげることができる。しかしブラジルの外資政策は1950年代の優遇策から変化し、次第に選別化を強め、1970年代に入ると内資優先を明確化するに至っている。

3. 欧米企業は概して1950年代から60年代にかけてブラジルに本格的に進出し、外資優遇策をうまく利用して企業基盤を固めたうえで、1968～74年のブラジルの高度成長期に企業規模拡大のための追加投資を行なった。これに対して、日本企業は1950年代後半から対伯進出を始めたが、本格的な進出は1970年代に入ってからで、70年代に対伯進出企業の70%が集中している。しかしブラジルの外資政策は優遇策から選別化、内資優先へと変化し、日本企業にとっての投資環境は次第にきびしくなっていた。加えて、ラッシュ型の進出が行なわれたために、準備不足や石油危機の影響などによって、1970年代に進出した日本企業の3分の1が、計画中止ないしは撤退に追い込まれる羽目となった。

4. 以上のように、日本企業の対伯進出はその70%が1970年代に行なわれたが、これらの企業はその基礎固めができないうちに、1980年代に入りブラジルの経済危機に直面した。欧米企業に比べて、日本企業の業績が全般的にあまりよくないのは、このような進出時期の違いに原因があるものと思われる。事実、ブラジルへの外国直接投資残高では、日本は米国、西独、スイスに次いで第4位(9.2%)を占めているが、ブラジル産業に占める日系企業の地位はまだ小さく、500大民間企業の売上げ総額に占める日系企業(マジョリティー出資のみ)のシェアは、米国企業の20%、西独企業の6%に対して1%強にすぎない。

5. 欧米企業に比べて日本企業の特徴は、日伯両国間の経済協力プロジェクト(いわゆるナショナル・プロジェクト)にもとづくブラジル政府との合併企業が多いことである。これは日本の対伯投資の目的が、ブラジル市場の確保のほか、資源の開発輸入にもおかれていることと関係がある。

6. ブラジルの外資政策など投資環境の変化に対して、日系企業はブラジル日本商工会議所を通じて「行動指針」を作成し、定着のための経営の現地化を進めるとともに、内資との合併や、マナウス自由貿易地域や輸出などのインセンティブの活用などの対応を図っている。日系企業が欧米企業と同様、ブラジルに定着、発展していくためには、環境変化に対応した経営戦略を打ち出し、これによって企業基盤を固めることが必要であろう。

なお、本報告の詳細は拙稿『ブラジル日系企業の研究』、昭和58年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書、文部省、昭和59年3月を参照されたい。その内容は次の通りである。

#### I 日本の海外直接投資におけるブラジルの地位

1. 日本の海外直接投資の推移
2. ブラジルの地位

#### II ブラジルの経済発展と外国直接投資

1. ブラジルにおける外国直接投資の歴史と現状
2. ブラジルの外資政策の変遷 — 優遇策から選別化へ

#### III 日本企業の対ブラジル進出の歴史と特徴

1. 日本企業の対伯進出の歴史
2. 日系企業の特徴

#### IV ブラジル産業における日系企業の地位

1. 外資企業の地位
2. 日系企業の地位

#### V 日系企業の経営戦略 — 環境変化への対応と問題点

#### VI 結 論